

オンラインで心はつながるか

大阪教育大学 神村 早織

私は大学で人権関係の授業を担当している。コロナ禍により約2年間オンラインを原則として授業を行ってきた。今年度からようやく原則対面での授業が復活し、キャンパスも学生たちの元気な声で賑わうようになった。しかし、受講者人数の多い授業は今でもオンラインのままだ。また、いつの間にか会議や研修などもオンラインが基本になっていることに気づく。オンラインでできることは多い。オンラインだからできることもある。しかし、それはコミュニケーションと言えるのだろうか。人権教育には、喜びや悲しみや怒りなど、人間の思いに共感的に寄り添うプロセスが欠かせない。

そんなことを感じていた時に、あるIT企業がリモート勤務から「原則出社」に切り替えたというニュースに出会った。(IT企業がなぜ「原則出社」回帰? 毎日新聞 2022.7.1) その会社はSNSを活用して動画で料理レシピを提供するサービスを手掛けており、その業界では最先端にいる。コロナ感染が拡大しはじめた頃には、いち早くリモート在宅勤務を導入した。IT企業ならではの迅速さである。ところが、一年ほどたって「原則出社」に戻すことにしたという。それには理由がある。オンライン(非対面)では会社の存亡に関わると判断したからである。最初の半年はよかったという。しかし次第に、個々人に仕事が割り振られた部門は成果も上がるが、何かを生み出すための創造的な仕事の部門では停滞することがわかってきたという。オンライン(非対面)の壁も、対面とともに仕事をしてきたメンバーならば乗り越えられた。ところが、新しいメンバーに変わっていくと信頼関係の希薄さが問題を引き起こしたのだ。この会社のCEO(最高経営責任者)は「同じ空間に集まり、同じ時間感覚で向き合って議論する」ことの意義を述べ、『雑談』は物事を動かす原動力」と語っている。

すでに心理学の研究により、オンライン(非対面)では、インフォーマルなコミュニケーションが発生しにくいこと、そしてそれが創造的な活動を阻むことが明らかになっている(林浩一 2022)。相手の表情や声の微妙な変化、またその場の空気を読み取ることができないために、他者に寄り添い他者の感情を共有する共感力が育たないのだ。また、脳科学者川島隆太は学生を対象にオンラインでの会話と顔を見ながらの対面の会話における脳活動を比較した研究結果として、オンラインでの会話の方では脳活動が反応していないことがわかったという。それらを踏まえた鮮烈なメッセージ「誰かとは話しているけれど、実は何となくコミュニケーションは深まらずに孤立化していく」「情報は伝達できるが感情は共感していない」(「オンラインで心はつながるか」朝日新聞 2022.1.17)は、オンラインで人間の情動にかかわる授業を試みてきた私の実感にあてはまる。あらためて、学生の顔を見て、学生の表情を見ながら授業ができる日を願う。